

大手建設会社の宣伝に、「地図に残る仕事」という秀逸なキャッチコピーがある。実際、建設会社に勤める知人と話すと「自分が関わった建物を見るのがやりがい」と語る人は多い。

そんな同業者と一線を画し、あえて「日の当たらない」道を選んだ人がいる。東京都の中堅ゼネコン・大豊建設に勤める鈴木高広さん(48)は、大学で土木工学を学び、「特殊な仕事に関わりたい」と掘削技術に定評のある同社に入った。以来約25年、ほぼトンネル一筋に歩んできた。崩落やガスの危険に加え、「掘るまで特性

縁の下の誰か

「がわからない」地面相手の作業は、掘っては微修正を繰り返す職人の世界だ。下水道など完成後目にすることもできない工事も多いが、「見えないからこそ、製品がきちんと機能を発揮した時の喜びは何物にも代えがたい」と笑う。

現在、現場所長として手掛ける東京都江東区の貯水トンネルは、大雨時の水害を防ぐため下水を一時ため込む全長4・2キロの巨大プロジェクトだ。同様の施設は昨年のも大雨でも東京を水害から守った。縁の下で、鈴木さんのような誰かが都市を支えている。

【坂井隆之】